

福永
武彦

「草の花」年立考

大森 郁之助

まえがき

本稿は福永武彦の長篇小説「草の花」（昭29・4新潮社刊）本文中の主要事項中、年・月または季節等を特定しうるものを年次別に整理配列すると共に、その折々の関係人物の年齢を推算付記して読解に資そうとするもので、主表と考証の二部から成る。猶、テキストは現在最も入手し易いものとして新潮文庫版（ふー4ー1、平成元年改版本）に拠った。

主表

年	月(季節)	事項	関係人物の年齢					
昭14? ^⑩	昭13	昭12	昭11 ^⑤	昭10 ^①	年	月(季節)	事項	関係人物の年齢
四月	四月上旬	三月下旬	秋 ^③	四月?	汐見茂思（旧制高校二年）、弓道部の新人部員として藤木忍（一年）を識る。	（この時）汐見十七歳、藤木十六歳。 ^②		
昭14? ^⑩	一月上旬? ^⑧	四月	伊豆半島H村で、弓道部の合宿。		汐見、藤木の妹千枝子（女学校一年）を識る。	この年度内に、千枝子、十三歳。		
昭14? ^⑩	（この時）千枝子十六歳?				（この時）汐見十九歳。 ^⑥	（この時）汐見十八歳、藤木十七歳。 ^⑥		
					（死没時）藤木十九歳。 ^⑨			

(1) この作品の作中事実の「年代」は、かなり後まで、あまり明確にはされていない。「冬」一二頁に「ストレプトマイシンがそろそろ出廻り出した

考證

昭 23	昭 22 ²⁴	昭 21 ²²	昭 20 ²¹	昭 18 ¹⁹	昭 17 ¹⁸	昭 15 ¹⁶
春 ²⁶	二月中 旬 ²⁵	春	一 月? ²⁷	?	九 月? ²⁸	八月下旬 ¹⁴
「私」 ²⁹ (→「春」の後半部分)	汐見、肺葉摘出の手術中、死亡。	汐見、東京郊外K村の外人宣教師経営のサナトリウム入院中、自殺を図つて彷徨。そののち、洗礼を受ける。 前半部の語り手)と同室となる。	汐見の父、空襲で死亡。	千枝子、石井と婚約。	千枝子、石井と婚約。出征。	汐見、信州のO村で、千枝子と最後の(と、なる)半日を過ごす。
この年度内に、千枝子、二十六歳。	汐見、 汐見二十二歳。	この時)汐見二十八歳? ²³	この年度内に、千枝子、二十一歳。	(この時)汐見二十四歳、 ¹⁵ 千枝子二十 歳。 ¹⁶	汐見二十四歳、 ¹⁵ 千枝子二十 歳。 ¹⁶	(この時)汐見二十四歳、 ¹⁵ 千枝子二十 歳。 ¹⁶

頃」とあるので、語り手「私」が主人公汐見茂思を識つたのが敗戦後まもない時期と察せられ、その時期に書かれた「第一の手帳」五四頁に「僕の人生の三十年」云々と云う汐見が、以下に「十八歳の時の春」と「二十四歳の時の秋」（五七頁）とを再現してみたい、としているので、回想される事柄は六〇十二年前、即ち昭和十年代に溯るらしいことが判るが、その程度の大まさである。年次が明確になる（明確にする手掛りが与えられる）のは「第二の手帳」に入つてからであつて、一六〇頁に、「大学を卒業」し「兵隊検査は郷里に帰つて受け」て、その「一年後に戦争が始」つた、とあるから、卒業は昭和十五年と決まる（兵隊検査を受けて一年後に開戦、という繋がりであつて、十二月八日の「一年前（つまり歳末）」に卒業したということではなかろう。戦中臨時措置の大学等卒業繰り上げの一年目は三ヶ月繰り上げで十二月卒業となつたが、この実施は十六年度末卒業（の筈だつた）分から）。そして、「第一の手帳」の中心をなす汐見の「高等学校二年」の「学年末」「三月から四月にかけての」（六九頁）伊豆H村での合宿は、汐見は大学も高校も（勿論、共に旧制。大学は文学部だから大・高共三年制）落第・浪人等のことがあつた旨の記述がないから、前記大学卒業時から溯れば四年前で、昭和十一年春と決まる。

その合宿行きの相談をしている「沈丁花が匂」う季節（即ち、春）に、「藤木を識つてからまだ一年にしかならない」（八一頁）とあるので、〈識つた〉のは一年前の十年春、藤木が入学して間もない頃。

（2）藤木忍の年齢は、「高等学校三年の冬休みに、敗血症で死んだ」時、「十九歳」（一一四頁）。

ところで、これらの年齢は数えか満かと考へると、法令で満年齢に切り替わるのは敗戦後の二十五年からだが、本作ではそれ以前に死亡する（後述、註22）汐見も「手帳」を満年齢で記しているようである。それが明らかなのは、前引、汐見の高校二年の学年末を十八歳の春と云つてゐることで、これは、中学卒業を待たず四年修了で高校に入学した最短コースの満年齢しかり得ない。即ち、四修入学者は高一修了時点では全員満十七歳、高二進級後、年度内の各々の誕生日に十八歳になり（学年末には全員十八歳）、高三での誕生日まで持続する（中卒入学者は高二の学年末には既に十九歳、また、数え年だと四修でも高二学年末には早生まれで十九、遅生まれ二十で、不適）。

そこですべて満年齢となると、高三の冬休みの「松飾りのとれたばかりの」頃（一二六頁）に十九歳であるのは四修入学で既に高三での誕生日を迎えていた遅生まれか一月上旬（松の内）生まれ、もしくは中卒入学で早生まれの者だが、もし藤木が後者だとすると、四修入学で高校では一級上の汐見と、年齢では同輩（つまり中学時代は学校は違つても「同期」）であることになる。しかし、例えば、一年生の矢代が「浪人一年だから」汐見「よりは年上」なので「多少の敬語は使」いつ、も「からかうような」「ちょっとひとを小馬鹿にしたような」態度を見せる（七一頁）のに準ずる、同年齢の気安さといったものは、藤木には見られない。年齢でも汐見よりは一つ下の、遅生まれ（又は一月上旬生まれ）の四修入学と見るのが妥当だろう（数学の教師に「七面倒な質問を」して「教壇で一時間立往生」（八五頁）させるような〈秀才〉の藤木のイメージには四修の方がふさわしい、ということもある）。

——従つて、藤木も汐見同様四修入学で、汐見が識つた入学当初にはまだ十六歳（四月上旬生まれ、などといふのでない限り）と見る。

（3）テキスト八一頁13行目参照。

（4）「第二の手帳」一五九頁に「兄は高等学校にはいったばかりで、妹は女学校にはいったばかりだった」と、また、藤木が高三で死んだ時「彼女は

女学校の三年生」とある。即ち、兄と、学校は違つても同学年。

- (5) 註1参照。
- (6) 六九頁末行参照。
- (7) 一二五頁4行目参照。
- (8) 「松飾りのとれたばかり」の頃（一二六頁）。
- (9) 一二四頁11行目参照。
- (10) 「第二の手帳」一五八頁に、千枝子が「或る女子大学の數学科」に進んだあるが、そのモデルとして当時〈女子大〉と称したのは日本女子大学校と東京女子大学の二校のみ、「数学」専攻の課程としては後者の「数学専攻部」（昭和二年開設、予科一年・本科三年）が唯一で、四年制高女の卒業者は予科に、五年制卒業者は本科一年に入学せしめた。千枝子がどちらのケースだったかは不明、四年制高女なら十四年春に卒業し女子大入学、五年制なら十五年春のこととなる。
- (11) 一六〇頁末行及び註1参照。
- (12) 一六〇頁16行目参照。
- (13) 「四月十八日に、アメリカの飛行機が一機、東京を空襲した時」（一八〇頁）。航空母艦発進のB25爆撃機による東京等六都市の奇襲は十七年の記述に統けて（年が更まつた等の記述なしに）下欄の件が述べられている。
- (14) 一二七頁15行目参照。
- (15) 「第一の手帳」五五頁15行目、五七頁8行目参照。
- (16) 一五八頁に、「僕（汐見）が最も親しくしていた頃の、つまり二十歳の」千枝子、という云い方が見える。千枝子は、夏の初め（汐見が「夏休みになつたら」何處かへ行くのかい？）といふ訊き方（一二四頁）をしている）に汐見に「あたしたち、もう会うのをやめましよう」「駄目よ、不幸になるだけよ」と告げて呆然とさせる（一二六頁）のだが、その一方では、夏の間ぢゅう苦しんだ結果「八月の末」には「嘗ての決心を半ば後悔」し、〇村での汐見との再会は「半ば偶然のよう」で「半ば予期していたよう」だった、と回想してもいる（「春」一六〇頁）。この年度の誕生日まではまだ十九歳だったのだから、〈最も親しくしていた頃〉とは、汐見の主觀に於てのみならず千枝子から見ても、この時期までを含むものと解する方がよかろうか。
- (17) 二三八頁に、「秋も深くなつた」或る夕方、千枝子の学友からこのことを聞いた、とある。
- (18) 二三七頁7行目参照。
- (19) 千枝子の最終学歴について再確認しておくと、註10に既述の点、及び、東京女子大は「〇村」に照應する長野県西長倉村（昭和十七年軽井沢町に合併）字「追分」に寮を持っていた（昭和十二年完成）こと（日本女子大の寮は軽井沢町字軽井沢）、また、学内で「無教会基督教の沢田先生」（一六〇頁）の「公開講演」が行われている（一〇六頁）こと（東女大は米国及びカナダのプロテスチヤント六教派と日本のキリスト者有志の協力による

設立だが、一方の日女大は既に「狭いキリスト教的範囲を離れて、宇宙的神の觀念に到達」していた時期（『日本女子大学校四拾年史』）の成瀬仁藏個人の發意による）等から見て、東京女子大をイメージした設定と想定し得るならば、同・数学専攻部の卒業は千枝子が予科を経たか否かに係わらず女学校入学から八年後（註10参照）、つまり十八年三月の筈のところ、十七年度は戦中臨時措置の卒業繰り上げの二年目で六ヶ月繰り上げだったから、十七年九月卒業というのが歴史上の事実に即した設定ということになる。

ところが、明らかに十七年の（註13参照）春のこと（であろう。「暖かい……午前の太陽」（一八三頁）・「急いで歩くと汗ばむほどの暖かい陽気」（二〇〇頁）などとある）として千枝子の母親に「あの子も来年は卒業」と言わせている（一八五頁）のは、少々大袈裟にいえば史実の改変ということになろう。しかしに、〈来年〉卒業とすることによって千枝子の卒業後の方針—その選択肢の一つとしての結婚が千枝子の母と汐見の間で一言二言ながら話題となり、汐見の心理を追い立てることにもなるのだが、〈今年〉卒業では急迫し過ぎ、改変するだけのことはあつたとも思える。しかし、或いはもつと単純に、千枝子の学校（課程）の修業年限までは所与の素材事実としてさほど強く意識されていなかつた（従つて比較的気軽には——少なくとも史実の改変という自覚はなしに——都合のよい年次に設定し得た）というだけのことだつたかとも思われる。という訣は、①モデルと想定した東京女子大の、数学「専攻部」でなくして、名分的にはそちらの方が中心だつた「高等学部」→「大学部」コース（受験動向の上では逆に遙かに劣勢だつたというが。以上『東京女子大学五十年史』に拠る）は男子の旧制高校→大学に準じた三年プラス三年の六年制だつたら、部外者（作者福永）にとって専攻部の修業年限は印象が薄かつたか（もう一つの〈女子大〉日本女子大は四年制だつたから、年数だけで云えば五年制高女入学から九年後の卒業）十九年三月卒業が六ヶ月繰り上げで十八年九月卒となり、本文に合致するが、それと混成（意識して）したか、今まで考えるのは、前述・総体的イメージを越えて年限にとらわれ過ぎるようにも思えるが）。

②さらに、より根本的には、作者福永にとつての、千枝子のモデルの不確かさ？という問題がある。兄藤木忍には明確にモデルが実在したことが作者自身によつて述べられており（『草の花』遠望、昭47・3新潮社刊『草の花』付載）、裏付けとなる第三者の証言もある（矢内原伊作『草の花』の頃、昭48・11新潮社刊『福永武彦全小説』二巻付録『月報』2）が、その一方で千枝子のモデルや福永の実体験性についても、例えば「遠望」に「千枝子にしても（略）原型があることを否むわけにはいかない」と、また矢内原文には「千枝子にも原型があ」り「その原型の人たちがあまりにもよく描かれている」とあるものの、忍のモデルの死の衝撃を縷々と綴る矢内原氏の当時の日記（『若き日の日記』——われ山にむかひて）、昭49・5現代評論社刊）にも妹がいたこと以上の具体的事實は索め得ない。一つの仮説としてもしも〈千枝子〉像に作者の創作・空想の部分が大きかつたとすれば、モデルの事実による心理的な制約（受動的）も再現の欲求（積極的）も小さいか或いは殆ど無く、その場その場のプロットの都合次第の設定とも成り得はしなかつたろうか。

(20) 「春」一二五六頁に「わたくしは女子大を卒業して石井と結婚し」と、卒業（十八年度も、九月に繰り上げ）から結婚へ一息に述べられている。引き続いてのことか。

(21) 二五四頁に「私」が搜しあてた千枝子の現居住地を「東海道筋のS市」とし、一二五六頁に「終戦の年」石井が「当地の高等学校に奉職」したので引き移つた、とある。「東海道筋」の旧制高校は静岡高校一校。

また、汐見の父親は東京からかなり遠隔の「郷里」（二つの「手帳」を通じて帰省を含む交渉は兵隊検査に帰つた（一六〇頁）だけ、汐見の術中死の後の郷里の兄の上京は翌日の「夜晚くか」翌々朝と予想（四九頁）されている）にいたもののように解され（三八、一六〇頁）、それが「空襲で死んだ」（三八頁）というのだが、地方都市への空襲は概ね二十年に入つてから。なお、汐見の家族は母親も「子供の頃」亡くなり、「私」と識つた敗戦後の時点では郷里の「年のひどく違つた兄」一人だけ（一六〇頁）。

（22）はなしは冒頭に溯るが、そもそも「冬」の場面の実年代は、というと、「私」がその執筆を目にしている（二二二頁）この時点で書かれたことに（一往は）なる汐見のノオト（二つの「手帳」に相当）の中に、「僕の人生の三十年」という表現がある（五四頁）。厳密にいえばこうした詠嘆的概括での「……年」は概数であり得ようし（げんに汐見二十歳の時と考えられる藤木忍の死を「既に十年以上」の昔（一二五頁）と云つてもいる）、又、これだけ大部の手記は短期間には書き上げられまいから、「三十歳」だつた時を過ぎてなお書き継がれた部分もありはしないか（三十歳に達する前からの執筆、ということは、「三十年」云々が「第一の手帳」の書き出し間もなくの句なので、考えなくていいが）、といった疑いもある。しかしまた一方では、汐見が「私」と同室になつたのは術中死を遂げる前年の春から（後註24）だがノオトの執筆を目に留められるのは冬にはいつてから、つまり翌年二月中旬（三三二頁）の死の三ヶ月足らず前からなので、とにかく「私」の目にした（作中事実として存在せしめられた執筆行為は短期間である、という、表現を重んずべきかとも考えられる。——「私」の目にとまる（作中に現れる）以前からのことかも知れぬ、何故なら現実的な執筆速度から計算して、といったふうな、表現以外（作品外での、ひよつとすると「表現」（作品）を無視し或いは侵犯しかねない史料は、程々にして置くのが、一作品の読解としては正統であろうか。

そこで、あらためて（汐見三十歳）ノオトの「執筆時期」（「冬」の中の最後の冬の頃、と単純化すると、汐見が三十歳であるのは昭和二十二年度内の誕生日から二十三年度の誕生日の前日までの間で（註2参考。十八歳だったのは十年度の誕生日から十一年度の誕生日前日まで）、その間の冬というと、生まれ月からいって大多数を占める遅生まれと仮定すれば二十二年の暮れから翌春までの時期が、該当（もし早生まれなら一年ずれて、二十三年暮れから翌春か）。

汐見の自殺未遂は、その最後の冬の「七草の終つた頃」から顧みて「一昨年のちょうど今頃」（三一頁）とされている。

（23）汐見の誕生月は不明だが、二年後のほゞ同じ季節に三十歳としている（前註22）ことから、恐らく。

（24）一六頁に「季節は漸く春を迎える」た頃、とあり、そのまゝ、続けて「その年の冬は」（二二一頁）と最後の冬に移っている。一三頁にも「私」は「彼」と隣合つて、一年足らずの「月日を過ごした、とするので、註22で推定した汐見の死から溯算。

（25）三三二頁に「手術は二月中旬に予定された」とあって、その後、予定変更の記述など、とくに無い。

（26）「春」（五五五頁8行目参照）